

はじめに——本書の特徴

第一部 戦中編

第一章 アジア・太平洋戦争下の国民統合と社会

一 国民組織の性格 3

アジア・太平洋戦争期の時期区分／開戦と国民の組織化／地域別組織とその矛盾／国民運動団体の性格／商業報国会／同和奉公会／農業報国連盟／翼賛壮年団／官製組織の独自性と自主性

二 翼賛文化運動の展開 14

外来文化の抑圧／在来文化の抑圧と利用／地方翼賛文化運動／工場文化運動／健民運動

三 経済統制の破綻 24

闇取引の蔓延／闇取引のしくみ／経済統制の解体／在日朝鮮人／戦時下抵抗の可能性／民衆宗教の動向

第二章 太平洋戦争期の青少年不良化問題

一 犯罪統計 40

犯罪の発生件数／統計の実情

二 生活基盤への着目 43

不良化の内実／原因は何か／職業選択の自由／社会の教育的力量の低下

三 錬成主義への転換 49

厚生省と司法省／短期錬成／無害を有益に／司法保護処分

第三章 戦時下の相撲界——笠置山とその時代

はじめに 61

一 昭和前期の相撲界 62

1 相撲をめぐる二つの立場 62

相撲Ⅱ芸能論／相撲Ⅱ近代的スポーツ化論／相撲Ⅱ武道論／大日本相撲協会／相撲界改革の実情／取り口の変化／春秋園事件

2 新型相撲の展開 79

学童相撲／相撲体操の考案／八尾秀雄と佐渡ヶ嶽／社会人相撲／海軍相撲／藤生安太郎／満州国の角道

二 相撲界と新体制 99

1 相撲の戦時統制 99

国家主義的改革論／警視庁の興行統制／佐渡ヶ嶽の『相撲道教本』／武道章検定

2 笠置山とその主張 111

職能国家論／ジャーナリズムの世界／力士の勤労奉仕／自由主義・個人主義／立ち合い制限批判
と技の禁じ手／手作りの理論／二重像の形成

おわりに 134

第二部 戦後・占領期編

第四章 戦後・占領期の社会と思想

一 社会の変化と戦後思想の出发点 139

1 戦後状況 139

敗戦と国民／国家の没落／焼跡と闇市

2 占領軍と民衆 144

恐怖から賛美へ／改革者としての占領軍／占領軍への投書

3 戦争責任論の諸相 147

責任追及の論理／文化界の戦争責任追及／戦争責任論の自覚化

4 争点としての天皇制 152

天皇制論議の動向／人間天皇論／天皇の戦争責任

5 教育改革 157

敗戦と教育／第一次米国教育使節団／教育基本法の制定

6 文化界の新潮流 161

出版界の盛況／近代主義とマルクス主義／宗教界の変動／大衆文化の発展

二 戦後思想と文化 167

1 敗戦のなかの民衆 167

敗戦と国民／戦争責任の追及

2 新しい価値観 171

「第二の開国」／焼跡と闇市の世界／新しい論壇の形成

3 「正義」と国家観 179

第五章 出版界の戦争責任と情報課長ドン・ブラウン

はじめに 186

一 戦争責任追及と用紙割り当て 188

二 戦争責任問題の決着——『主婦の友』をめぐる対立 197

おわりに 206

第六章 占領の傘の下で——占領期の『思想の科学』

三種の文章／宗教思想の紹介／人間の幸福観をめぐって／科学と宗教・倫理／マルクス主義者セ
ルザム／社会主義と個人主義の両立可能性／言語・思想以前のものへの着目

213

第七章 占領期日本のナショナリズム——山田風太郎の日記を通して

はじめに 234

一 ロスト・ジェネレーションの戦後 238

二 ナショナリズムの様相 240

1 反米・反占領軍の姿勢 240

2 日本人論 242

3 「平和国家」論批判 244

4 東京裁判批判 247

5 天皇制論 252

おわりに 254

234

第三部 転換期日本の文化

第八章 戦中・戦後のイデオロギーと文化

はじめに 263

一 戦時下の文化 265

1 戦時動員体制の形成 265

支配イデオロギーと文化論／思想統制と文化活動

2 文化界の国策協力 269

一元的統制団体の成立／「教育」の範囲の拡大／「文芸紙芝居」の出現

3 知識人と国民文化 274

「文化の二重構造」とその克服／技術者の地位向上をめざして／戦時下の読書運動と移動演劇

4 太平洋戦争期の文化 282

占領地での「文化工作」論／生活科学論の隆盛／小磯内閣と「言論暢達」

二 戦後文化の発 287

1 第二の開国 287

輝かしい「近代」と「文化への欲求」／三木鶏郎と花田清輝

2 政治と文化 292

知識人・文化人の政治指導者化／文化人の戦争責任／世代論の横行／文化の自立性

3	戦後啓蒙主義の性格	299
	内面倫理の形成と新日本文化論／戦後啓蒙主義の盲点	
おわりに		303

補章(二) 書評 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』

一	転向論	308
二	「文明のハシゴ段」	311
三	「鎖国性」について	316

第四部 象徴天皇制論

第九章 藤田省三の象徴天皇制論

一	「風流夢譚」事件と天皇制	323
1	象徴天皇制の問題点	323
2	「風流夢譚」事件と藤田省三	324
二	天皇Ⅱ不執政の意味	326
三	大衆意識上の天皇観	331

四	「大衆天皇制論」への批判	333
五	象徴天皇制の政治学的検討	340

補章(二) 近年の象徴天皇制研究と歴史学

はじめに	345
------	-----

一	象徴天皇制に対する新たな研究視点	346
---	------------------	-----

天皇の「公務」の内容／「皇室規範」制定の提案／天皇の「統合力」と「無関心」／松下圭一の天皇制論への疑問

二	河西・富永の近著をめぐって	352
---	---------------	-----

「文化平和国家」と天皇／議会主義的君主制と天皇

初出一覧
あとがき